

立ち会い出産再開の病院「気持ちに応えたい」

新型コロナウイルス感染拡大の「第五波」が落ち着きを見せる中、出産の際に家族の立ち会いを再開する動きが、一部の産院で出ている。母子への感染対策を徹底するため、家族の事前の行動を細かくチェックしたり、立ち会いの時間は短くしたり。コロナ禍前の日常をどう取り戻すか、家族の新たな出発の場でも試行錯誤が続いている。

(山野舞子)

Withコロナ

新たな命どう迎える

絆深めるため 試行錯誤



出産直後、第1子の女児を胸に抱く原田有華さん(左)と立ち会った夫敦也さん=名古屋市南区のアイ・レディスクリニックで(同クリニック提供)

五日深夜、名古屋市南区のアイ・レディスクリニック。原田有華さん(三二)は、分娩台の上で第一子となる女の子をいとおしそうに抱いた。夫敦也さん(三三)が寄り添った。

陣痛が始まって数時間、有華さんの腰をさすり続けた敦也さん。「苦しむ表情を間近で見て、感謝の気持ちと今後もしつかりサポートしなくちゃという思いが強まった」。有華さんは「そばにいるだけでリラックスできた」と、紹介を一層深めた時間を振り返った。

同クリニックでは立ち会い出産の希望者が年々増加し、近年は九割に上る。ただ、二〇二〇年四月以降はコロナの

感染状況を見ながら、立ち会いの中止と再開を繰り返さざるを得なかつた。看護師長の

上園一美さん(四六)は「中断が決まって、涙する父親もいた。断腸の思いだつた」という。

愛知県で緊急事態宣言が解

除された十月、感染対策を徹底して希望者の立ち会いを再開した。出産予定日の一ヶ月

前には、夫婦やその両親らへも問診票を配布。発熱や体調の変化、外出に関する項目を

確認してもらう。院内に家族が入るのは陣痛が進んでからに限定。分娩室に入る際は、感染予防のガウンを着用する。産後の家族との面会は、今も中止したままだ。

鷺見成晴院長は「分娩時の満足度は、その後の育児に大きく影響する。今後もリスク

は承知の上で、できるだけ妊婦さんや家族の気持ちに応えたい」と話す。

岩田病院(同市中村区)も

チェックしてもらつ。院内に家族が入るのは陣痛が進んでからに限定。分娩室に入る際は、感染予防のガウンを着用する。産後の家族との面会

は、認める条件として、夫が抗原検査で陰性▽妊婦は可能な限りPCR検査を受ける▽夫婦とも十日以内に発熱など

の症状がない一点などを設けている。

一方で昨年春から立ち会い

出産を中止している日本赤十字社愛知医療センター名古屋

第二病院(同市昭和区)によ

うに、再開にはなお慎重な医

療機関もある。

谷区)が6月に全国76の産院を対象に実施した調査によると、立ち会い出産を「受け入れていない」は44.7%で、「制限付きで受け入れている」は51.4%だった。

出産に立ち会う夫の割合は増えている。厚生労働省が支援する研究の一つとして発表された調査によると、経腔(けいちつ)分娩の場合、2006年に39%だったのが、11年には59%に上った。

四天王寺大看護学部(大阪府羽曳野市)の宮本雅子准教授(母性看護学・助産学)は、立ち会い出産について「父親の育児への責任感情や子どもへの関心が高まる」と利点を指摘する。その上で、コロナ禍で母親が孤立しやすい状況が続いているとし「感染状況が落ち着いていたら、対策を十分取りながら続ける工夫を模索してほしい」と話す。

医療機関 割れる対応

コロナ禍の中での立ち会い出産について、日本産科婦人科学会は各医療機関に判断を委ねており、対応は分かれている。同学会の木村正理事長は「各地域で感染状況が異なり、病院ごとに設備にも差がある」と説明する。

子育て情報サイトを運営する「ベビーカレンダー」(東京都渋